

第5章 環境保護文化における対立

——台湾の奉茶志工と環境保護活動家*——

何 明 修

はじめに

グローバル化とは、基本的には国家間における品物および金銭、人、アイデアのやりとりが急激に増加することを指すが、環境保護主義または社会的機関の構造改革を行い生態系の危機に対処させようとする意識的な試みは多くの人にとってグローバル化とほぼ同義となっている。世界中の環境保護活動家たちは、あたかも自分たちが結束の強い均一な先駆者グループであるかのように、「地球規模で考え、足元から行動せよ」と主張している。環境保護主義の「グローバル性」は、世界中のさまざまな地域の強い類似性を示すものである。つまり、人類全体は同じ課題に直面しているのだ。

環境保護主義に関するこうした簡単な解釈は、直感的に理解できよう。なぜなら、こうした解釈は我々の日々の経験と深いつながりがあるからだ。環境災害に国境はなく、その悪影響は多くの場合全世界に広がる。それはっきりした例が酸性雨の発見だ。燃料として大量の石炭を使用したイギリスの工業化によっていかにしてスカンジナビアの森が破壊されたか (Hannigan 1995 : pp. 136-137) という実例は、単一の生態系に属する異なる社会同士の複雑な相互関連性を実証するものである。最近では、生物多様性の損失や気候変動、放射能汚染が「グローバルな問題」として一般に認知されている。さらに、「アースデイ」および「地球サミット」からも明らかのように、環境保護活動家たちはグロー

バル化に関する話し合いの先駆的実践者である (Yearly 2007)。国際舞台において、環境保護活動家は、国家の力だけに頼ることなく社会的変革を促すことを目指し、その結果「世界市民政治」の創出に一役買った初期の参加者に含まれる (Wapner 1995)。

こうした「グローバル化としての環境保護主義」という見解を最も明確に示しているのが Ulrich Beck の論文だろう。Beck が呼ぶところの「世界リスク社会」の到来には、「すべての国境と国家分裂を越えて責任と行為を共有する場の創出」が必要となる (Beck 2006 : p. 23)。より厳密に言うと「世界主義化」またはより高度かつ複雑な形態のグローバル化こそが現代の特徴であると Beck は主張している。典型的な「世界主義的意識」には、世界社会における危機に対する認識が含まれる。そこで、人類により「文明による運命共同体」が形成されるのだ。2011年3月に発生した福島県における大災害をうけて世界中から日本人に寄せられた同情と反核運動の復活は、世界リスク社会時代における世界主義意識の一例だろう。

環境社会学の分野において、現代の環境保護主義を理論化しようという試みがなされている。現代における環境保護主義の高まりは、自然に対する認識が人類にとっての資源であるという認識から、相互依存的な生態系であるという認識へと徐々に変容させてしまう西洋の近代化の産物であると、世界の環境制度理論家は主張している。国際的な科学者たちは、最新の発見を広め、国立公園・環境影響評価などの現代の環境規制を制定する手助けを行う「知識共同体」を構成している。特に、これらの理論家たちは、環境意識の高まりを組織化と行動主義の産物とする従来のボトムアップ式の解釈法に異を唱えている (Frank *et al.* 2000a, 2000b ; Schofer and Hironaka 2005)。こうした理論家たちにとって世界環境制度は「トップダウン」方式で機能するものであり、各国家は自国の自然環境を保護する義務があるのだ。

生態学的近代化理論によれば、発展による副次的な悪影響を考慮すると、産業社会は技術的により高度な形態の近代化へとさらに進んでいくことが予測される。生態学的に近代化した社会は、環境劣化に対する意識の高まりと、公害

および資源の枯渇という問題を解決しようとする科学者および政治家、ビジネスリーダーによる意識的な努力によって特徴付けられる (Mol *et al.* 2009)。

上記2つの理論は、世界の環境問題を本質的に同一のものとして捉えようという主張において意見が一致している。この仮定によれば、西洋の環境保護主義は世界のその他の地域の未来の姿を示していることになる。グローバル・サウスの軌跡に注目するその他の理論家は、こうした世界的普遍主義に異を唱えている。GuhaとMartinez-Alier (1997) は、環境保護主義には主に2種類あると主張する。豊かな国々においては、裕福な暮らしと利他主義に基づいて手つかずの自然を破壊から守ろうと努力する、いわゆる「自然保護十字軍」が生まれる一方、貧しい人々が土地収用の危機に直面している発展途上国においては、「生活をかけた戦い」が日常的に見られる。特にGuha (1989) は、ヒマラヤの農民が自身の村の木々に抱きついて材木会社による土地の侵害に抵抗したインドのチプコ運動に対する、男女同権主義・精神主義的な（誤った）解釈に強く異議を唱えている。本来、チプコ運動は、自身の生き残りのみを目的とした伝統的な農民による抵抗運動の延長にすぎないのだ。

Martinez-Alier (2004) は、世界的均一性どころか、資源の枯渇と公害の観点から見ると、豊かな国と貧しい国における生態分布は現在かなり不均一であると主張している。グローバル・サウスの見地から、研究者たちは、発展途上国の環境的苦境の原因は経済的好機の欠如ではなく、貧困層から共有地を収用してしまう恐れのある資本主義的囲い込みの危険性であると指摘する (*The Ecologist* 1992)。したがって、1987年に国連の環境と開発に関する世界委員会が仰々しく宣言したように、「共通の未来」というものは存在しないということになる。誤った普遍主義は、非常に多様な環境問題の本質を隠してしまうという点に問題がある。

本論文では、環境保護主義をグローバル化と単純に同一視することを批判するという点で、上記の2つの理論のうち、後者の見地に従うものとする。資源および危機の分布に着目する政治経済学的観点からではなく、環境保護主義の文化的側面に焦点を合わせ、西洋から入ってきた考えがどのように加工され、

地域の伝統と融合するのかを分析する。

高雄市の柴山（別名「薪の山」）における環境保護に関する論争についての徹底的な事例研究を行うことで、この議論に関与している2つのタイプの関係者についての分析を行う。環境保護活動家たちは、自然を本質的に貴重なものとして扱う生命中心主義的立場を取っており、人間による侵害から柴山を守ろうとしている。彼らの多くは1992年に社会運動団体を結成した中流階級の専門家であり、彼らの絶え間ない活動がきっかけとなり、1997年に柴山自然公園が設立され、2011年には国立公園に昇格した。一方、茶を振る舞うボランティアを行っている奉茶志工は、他の登山仲間のために新鮮な茶を淹れるために水や調理用ガス、その他の湯沸かし器具を持参し始めた登山客を起源としている。現在、奉茶志工は柴山の3地点に集中しており、日中に柴山を訪れる登山客が山で温かい茶を楽しむことができるよう、交代制で器具の運搬およびお茶出しを行っている。柴山を天然のジムや野外レクリエーションエリアとして捉えている点で、奉茶志工は言うまでもなく人類中心主義である。それ故に、森林開拓や茶道具の備蓄など、奉茶志工の活動は環境保護活動家から非難を浴びている。これが、10年以上にわたる双方の対立につながっているのである。

本研究のために、2009年から2010年にかけて環境保護活動家たちに2回、奉茶志工たちに15回の徹底的なインタビューを実施した。また、2009年から2011年に、柴山にハイキングに訪れ、野帳に31回の書き込みを行った。文書データは、雑誌およびインターネットから得たものである。

柴山の事例に入る前に、次の節で台湾の環境保護主義のグローバルな側面と地域的側面について議論する。

1. グローバルおよび地域的視点から見た台湾の環境保護主義

著書 *Discovering Nature: Globalization and Environmental Culture in China and Taiwan*において、Robert Weller (2006) は台湾の環境保護主義の文化的側面についての素晴らしい分析を行っている。基本的に Weller は、1980

年代半ばの環境運動の登場によって台湾人は「自然を発見した」と主張する。それ以前は、文化と自然の二元性という西洋的概念を認めていなかった現地の文化にとって、人類の前に立ちはだかる実在物としての自然という概念はなじみのないものであった。台湾が自然との運命的な出会いを果たすことができたのは、戦後の急速な工業化の後に深刻な生態学上の危機に直面したためだが、国連およびアメリカから環境保護に関する有力な説が国内に入ってきたためもある。しかし、Wellerは、根強い土着文化が存在することや、国際的な情報源が互いに相反するものではないとしても異種なものであることを指摘しており、世界で行われている実践を真似ただけの特徴のないものであるとして、台湾の環境保護主義の単純化されすぎた図式を否認している。そのため、台湾版の環境保護主義は、雑種または現地の伝統と西洋の近代性のはざまに位置する「伝統から外れた礼節」である（Weller 1999）。筆者は Weller の見解に概ね同意しており、環境保護運動についてもその見解を採用するものとする。

実際、台湾の初期の環境保護活動家たちの多くは、海外で教育を受けた経験があるため、正しい知識を持っていた。1980年代前半に第1回の原子力論争に火を付けた反核主義の学者たちを例に取ってみる。この学者たちはアメリカで訓練を受けた科学者たちであり、1979年のスリーマイル島での事故がきっかけで反核派に転換した。台湾に戻ってから、彼らは地域規模で現代アメリカの反核論を展開した（Ho 2003 : pp. 689-690）。科学者が理性的かつ普遍的な言葉を用いた一方、草の根の公害反対運動はその情熱と激しさで知られていた。当初、公害被害者による活動はあまり組織立ったものではなかったため、工業生産者に対してバリケードを築くという行動に走ることが多かった。多くの識者により指摘されているように、草の根の環境保護主義は多くの場合、民間信仰とともに進められた。公害は地域社会の福利にとっての脅威であると認識され、信奉者を保護する守り神が呼び出された（Lu 2009 ; Ho 2005 ; Reardon-Anderson 1992）。

つまり、台湾の環境保護主義は中流階級の専門家と被害を受けた一般市民の相乗によって生み出されたものであったが、社会現象学の用語を借りれば、基

本的に専門家と一般市民は異なる「意味の世界」で活動していたのである。西洋式の環境保護を掲げる活動家たちは、自身の行動は現在の世界の流れに沿ったものであると考える傾向にあり、自身の取り組みは地球を救うという世界的な流れの一部であると捉えている点で、彼らの考え方は世界主義的であった。しかし、草の根の活動家は、自身のコミュニティの空間的境界を超えて環境問題に対して関心を抱くことが、ほとんどない生粋の地元住民であった。

したがって、これら2つの活動グループは、協力し合って公害と闘うための共同の取り組みを行うこともあれば、対立することもあった。Weller (2006: p. 115) の分析によると、「普遍主義および生命中心主義を掲げる NGO 幹部の願いとは裏腹に、こうした地域団体のすべてが人間の福祉を第一として自身の地域のためだけに活動しているのだ」。公害に対する金銭的賠償という問題となると、特にこの論争は激化した。中流階級の専門家の立場からすると、公害の被害者であることを理由に物質的な利益を要求することは、「環境への裏切り」という恥ずべき行為でしかなかった。専門家たちからすれば、いかなる形の公害をも頑なに拒否することこそが、地域住民がすべき唯一の正当な主張なのだ。しかし、地域住民の意見としては、賠償は自分が受け入れざるを得ない次善の選択肢にすぎなかつた。結局のところ、環境悪化に苦しみ、健康や生活、資産価値などの面で個人的な犠牲を払つたのは地域住民だったのだ。地域住民にとって、彼らの土地を大事にする方法を指導した環境専門家の行動は恩着せがましく思え、彼らは専門家の独善的行為に不快感を抱いた。地域住民がその地域の政治家の指示に従い金銭的賠償を要求し、NGO 指導者からの善意の介入を敬遠した1988年の林園事件における有名な対立の原因も、文化的志向性の違いであった (Ho 2010)。

産業公害との闘いという分野においても、世界と地域は協力し合うときもあれば対立するときもあるというパターンを展開している。環境保護に関するその他の問題において、地域の文化的伝統は環境保護活動を世に広めるのに役立っているという点でかなり順応性が高いと言える。中国文化において、女性は「面倒見の良い母親」としての役割を果たすことが求められており (Weller

1999 : pp. 111-121)、女性主導の主婦連盟により、消費と教育に関する問題により重点を置いた、従来とは異なる環境保護活動が展開された。主婦連盟は、環境に優しい農業と健康志向の消費の促進を目指す自然食品協同運動の草分けであった。現在、連盟の食品協同組合には3万世帯以上が加入しており、台湾における最大の非営利販売網となっている (Chang 2009)。

また、資源再利用は、政府の取り組みが一貫して期待はずれに終わってきた分野である。この欠点を補うために、台湾の大規模な仏教団体「慈濟」が、信者を動員し、家庭ごみを収集、分類、再利用するボランティア活動を率先して行った。仏教団体は、「幸福に対する感謝」(惜福)、「善行に応じた報い」(功德)という伝統的な教えを現代風に解釈し、信者の関心を資源再利用に向けさせたのである。Madsen (2007)によれば、これは台湾の現代社会が直面する課題に対処するための、宗教指導者による取り組みの一環であった。非常に多くの人々が仏教団体「慈濟」を環境保護団体と見なしていることが報告書により示されるなど、仏教団体主催の再利用キャンペーンが成功を収めたことは明らかであったが、より有力な活動重視型の団体を例に挙げることができた人はごく少数であった (Chen 2008 : p. 144)。

わかりやすく言えば、既存の研究においては、台湾の環境保護主義はグローバル社会から移植された変異体であるという単純な主張が裏付けられておらず、極めて重要な懸念事項として環境問題が浮上してくるにつれて、次第に地域の伝統が特定の西洋の近代性に取って代わられるという予測の立証もなされていない。産業公害および自然食品、資源再利用に関する事例においては、異なる文化間における活発で興味深い相互交流について知ることができた。都市保全の領域において、こうした文化間の対話がどのように展開されるかは現時点では不明である。

2. 環境保護活動家：柴山保護運動¹⁾

現在の柴山は、北部の海軍港と南部の商業港にはさまれた丘陵地を指す地名

である。高雄市の中南部に位置する柴山は、以前は打狗山、そして壽山と呼ばれていた。その戦略的立地から、柴山は1930年代半ばから日本の植民地政府により軍の管理下に置かれてきた。戦後の国民党政府は、台湾が民主化プロセスに着手し始める1980年代後半まで、入山制限を継続し、柴山における経済活動を禁止した。長期にわたる軍の駐留は、生態学的資源という観点において柴山の保存状態が非常に良い状態で保たれるという予想外の結果をもたらした。

1980年代後半に軍の管理が次第に緩和されるにつれて、他の高雄市民同様、ジャーナリストと作家、医師、弁護士、建築家からなるグループも柴山を知ることになった。当初彼らは、休日に地図に載っていない柴山の山岳地帯の探索を楽しむ友人グループであった。柴山の手つかずの美しさに魅せられ、彼らはトレッキングするだけではなく、何かそれ以上の行動を起こす必要があると確信した。自身のメッセージを一般市民に発信するために、彼らは地元の美術館で写真展を開いた。その後1992年に彼らは柴山自然公園促進会（CNPPS）を結成した。

彼らは、休暇で東京を訪れた際に、人口が集中する下町である上野に保存状態の良い鳥類保護区があることを知ったことがきっかけで、自然公園という理想を抱くようになった。大都市と自然の平和な共存、つまりは不注意な登山客と強欲な不動産開発業者から柴山を守るために、一致団結した取り組みが彼らの第一の目標となった。彼らにとって高雄市は、人道的精神文化の投入時期がとっくに過ぎた見苦しい工業都市であった。自然との暮らしは、健全であると同時に都市の改善につながるものでもあった。柴山は、都会に慣れすぎた住民にとっての最後の贖罪の手段であると見なされた。この目標を推進するにあたって、CNPPS メンバーの専門的能力と金融資産は貴重な資源であった。柴山の自然美と環境保護の差し迫った必要性を公にするために、CNPPS は図表入りのパンフレットを作成・出版した。

CNPPS メンバーには文才があったため、いつでも簡単に自身の要求を非常にわかりやすい言葉に置き換えることができた。当時、一部の CNPPS メンバーは地元のメディアで働いており、自身のメッセージを広範囲に向けて樂々

と発信することができた。ほどなくして、CNPPSは最も権威のある柴山に関する情報源となった。また、1990年代半ばに、CNPPSは、環境教育プログラムを開始し、旅行客向けのガイドとして働く「生態解説員」を目指すボランティアの訓練を行った。このプログラムのおかげで、CNPPSは創設メンバーである専門家の枠を越えて、さらに多くのメンバーを採用することができた。新メンバーの中では、学校教師の数が多く、環境保護の信条を生徒に伝えていく教師は非常に重要な存在でもあった。

市の職員は当初、「国立公園」または「都市公園」といった法定用語ではないという理由で、自然公園という理想に対して懐疑的であった。奇立った環境保護活動家たちは、政治家と土地投機家が密かに癒着しているのではないかと疑いもした。1997年に高雄市政府がついに柴山自然公園の設立を宣言し、CNPPSのキャンペーンが実を結んだ。自然公園には、海拔10m以上のすべての陸地部分が含まれた。公園面積は約1,200haにわたるものであったが、土地の6分の5以上は依然軍当局の監視下に置かれた。区画化を行うというCNPPSのアイデアが採用され、法律にも記載された(Kaohsiung City Government, 2003)。

1997年の柴山自然公園の設立によって、自身の任務の第一段階を達成した環境保護活動家たちが次になすべきことは、主張者から教育者への転身であった。CNPPSの初期の指導者たちは、組織を正式登録せず、政府の助成金を申請しないことで政治的独立を図るという活動戦略を思い描いていた。後に、新たな指導者たちはこの方針を変えることに決めた。組織は2001年に正式登録され、新しい組織名は柴山会(THA)となった。また同年、THAは年に1度の教育活動である柴山祭の開催も開始した。柴山祭は、生態学的豊かさを祝う祭りで、主に児童とその親を対象としていた。市政府からの助成金は、このイベントを実現するためには欠かせない資金源であった。2010年に、THAと公的部門の連携がさらに進み、市政府によって新たな生態学教育センターが設立され、その日常運営がTHAに委託された。

ある意味では、独立した主張者から政策協力者への環境保護活動家の段階的変容は、台湾の活気に満ちた市民社会の影響の高まりを示すものであった

(Fell 2012 : pp. 171-191 ; Hsiao and Ho 2010)。しかし、決して環境保護活動家と市政府職員の間の協力関係には摩擦がなかった、ということではない。むしろ、THA の活動家は、市政府が柴山自然公園に最低限の注意しか払っていない、と不平を漏らし続けていた。政府は広大な敷地を保全するのに十分な監督官を雇っていなかったため、囲い込みや開墾、家畜の飼育、破壊といった登山客や近隣住民による違法行為が変わらず続いた。さらに、有力な寺院や実業家、政治家による土地の占有や商業的利用が広く行われており、市政府職員は依然としてそれを黙認していた。市政府によるいい加減で資金不足の環境保護活動に苛立ちを覚えた THA の活動家たちは、より高位の当局者による介入しかさらなる生態系被害を避ける道はない、と確信した。これこそが、彼らが公園の管理を中央政府に格上げするという考えに賛成した理由である。THA の協力により、2011年12月についてに壽山国家自然公園が設立された。

3. ボランティア——すべての人のためのお茶出し——

さまざまな点で、CNPPS/THA の活動家は「自然保护十字軍」というモデルにほぼ当てはまる。彼らの顕著な特徴としては、上位中流階級の人々による参加、脱物質主義的価値観、手つかずの自然の利他的保護が挙げられる。一方、奉茶志工たちの社会における経験は活動家たちとは異なる。インタビューに協力してくれた15人の奉茶志工のうち、11人が進んで職業を明かしてくれた。その内訳は、公務員が1人、医師が1人、建設作業員が3人、実業家（経営者および店舗経営者）が6人であった。筆者の推定では、奉茶志工は概して下位中流階級であり、CNPPS/THA の指導者層のほとんどを占める弁護士や医師、ジャーナリストなどのリベラル派の専門家は奉茶志工の中には少ない。

さらに、性差も顕著である。環境保護活動家たちの間では、性比率はより均等であり、女性が中核的指導者層を形成している。例を挙げると、2001年から THA の事務局長を務めているのはドイツで教育を受けた女性である。奉茶志工のほとんどは男性であり、インタビューに協力してくれた15人も全員男性で

あった。女性ボランティアが茶を淹れているのを時折見かけるが、水が入った20kgの容器を持って山を登る女性には出会わない。当然のことながら、女性にとっては体力が大きな課題となる。奉茶志工はそのほとんどが40代から50代の中年層である。

現在、柴山エリアには、七蔓、盤榕、雅座の3つのお茶出しエリアが存在する。各エリアにはそれぞれの奉茶志工チームがあり、交代制で水や茶の材料、調理用ガス、その他の器具の運搬を行い、湯を沸かしたり、茶を淹れたりしている。七蔓は現在使われていない鉱山道路沿いに位置しているため、車両を使うことができる。盤榕および雅座は山頂に近いため、重い物資を運ぶのに一時間必死に歩かなければならない。3つの奉茶志工チームは、それぞれが最も多くの登山客を呼び込み、自分のチームの茶を楽しんでもらいたいと考えているため、微妙な競争関係にあるが、お互いに協力し合うこともある。盤榕のチームが最も規模が大きく、100人の奉茶志工からなる。その規模から、同チームは自分たちの懸命な働きを称賛するために毎年年末の宴（尾牙）を開催している。雅座のチームは、水の容器にチーム名の書かれたステッカーを貼っていることから、最も組織化されたチームであると言える。さらに、雅座には盤榕にはない東屋があるため、チームの本部が登山客にとっての「第二の我が家」になるよう、さまざまなポスターや二行連句で装飾をしている。七蔓のチームは、奉茶志工にとってその交通の便があまり魅力的ではないからか、メンバー数も団結力も平均的と言える。同チームは人員不足という慢性的な問題に悩まされており、2009年12月から新メンバー募集のビラを貼り出している²⁾。

これら3つの地点ではそれぞれ配合や風味の異なる茶が振る舞われているため、柴山を訪れる人は、すべての地点で茶を楽しみたくなることだろう。雅座の奉茶志工は、桂皮や西洋人参、大麦、玄米、はと麦を特別にブレンドした茶を提供している。七蔓のチームが使用している材料は上記のものに類似しているが、同チームは、材料を前もって調理しているため、よりさっぱりとした味わいが楽しめる主張している。盤榕では、梅緑茶、生姜茶、洛神花茶、大麦茶の中から日替わりで選ぶことができる。ほとんどの場合、茶は温かい状態で

振る舞われる。つまり、奉茶志工は繰り返し茶を淹れ続けなければならないということである。天気の良い休日には、常に温かい茶を振る舞うために1つのお茶出し場で3人または4人の奉茶志工が休みなしに働く必要がある。伝統的に、温かい茶は体に良いと考えられており、アメリカ化されたテレビコマーシャルで見られるような、運動で汗をかいた後に冷たい飲み物を飲む行為は通常冷ややかな目で見られる。柴山で振る舞われる茶にはさまざまな種類があるが、それらはすべて健康に良いと言われている。

上記のように、茶の材料は栄養を考慮して厳選されているため、かなりの費用がかかる。さらに、高雄エリアの水道水は飲用に適していないことで有名であるため、奉茶志工は費用のかかる浄水手段である逆浸透装置を使用してろ過した水のみを使うよう注意を払っている。これらをすべて合わせると、かなりの額になる。盤榕のチームは、定期的に資本収支を発表している。それによると、2010年の最初の3カ月で、同チームは6万7,000 NT ドルを費やしたという³⁾。こうした費用を賄うために、同チームは現物または現金での寄付を募っている。報道によると、高雄市のある市会議員が七蔓に毎月1万NT ドルを寄付しているという⁴⁾。また、地元の別の議員は使い捨て紙コップを寄付しているとのことである⁵⁾。

少なくとも軍による支配が次第に廃止されていった1990年代初期以降、柴山におけるお茶出しは、このような組織だった形で行われていた⁶⁾。茶の種類や質の点においても、山道を上ってすべてを運ぶという過酷な取り組みが行われている点においても、この柴山の例に類する場所は台湾のどこにもない。実際、奉茶志工が「高雄市をより愛すべき都市にしてくれた」ということで、彼らの利他的功労を紹介するPRビデオの撮影を行った(Kaohsiung City Government Information Bureau, 2006)。現市長の陳菊は、かつて七蔓を訪れたことがあり、「公共の福祉の促進」に対する奉茶志工の努力に大きな感銘を受けた。彼女は茶を数口だけ飲み、「山に水を運ぶのはとても骨が折れる仕事ですから、あまりたくさんお茶を飲みすぎてはならないと思います」と感謝の気持ちを込めてコメントした⁷⁾。

政治指導者たちも好意的な評価をしており、概して平均的な市民の意見と一致している。定期的に山登りを楽しむ登山客に対し、奉茶志工は温かい茶以外にも多くの重要なサービスを提供している。必要に応じて、彼らは行方不明者を救出したり、けが人を助けたり、疲れた人に食事を振る舞ったりしている⁸⁾。前述のとおり、市政府は柴山を管理するための十分な人員を確保することができないため、七蔓、盤榕、雅座に常に詰めている奉茶志工たちこそが、不運な登山客がいつでも頼ることのできる事実上の緊急事態管理者になっているのである。かつて、ある夏に突然の激しい雷雨が柴山を襲い、登山客を恐怖に陥れたことがあった。雅座では、20人以上の人々が東屋に避難した。当時、ある1人の奉茶志工が自ら名乗りを上げて怯えた登山客の集団を先導した。彼は傘を持っていない人々に使い捨てのレインコートを配り、空腹に苦しむ人々が「下山ルートを進む力を取り戻すことができるよう」にと、自分が持っていた軽食を分け与えた。雨が次第に弱まり、人々が立ち去り始める中、彼は滑りやすい段差に気を付けるよう全員に言い聞かせた。筆者は、ある母親が自分の娘に「お兄さん」にお礼を言ってきなさい、と言っている姿を見かけた⁹⁾。

総じて、奉茶志工が柴山におけるお茶出しとその他の活動を行う理由を2つ挙げたい。まず1つ目の理由として、もう定期的な山登りでは満足できない彼らは、水を担ぎながらの登山を自身の身体的能力を鍛えるための最高の運動であると捉えていた、ということが挙げられる。ある医師は、より困難な登山活動に挑むために体を鍛えたいという理由で奉茶志工になった。当初、彼は山頂に辿り着くたびに水を捨ててしまっていた。他の奉茶志工が、せっかく努力するのならもっと有意義なものにしたらどうかと勧めたため、その後彼は容器に浄水を入れ、お茶出し場にその水を供給するようになった¹⁰⁾。つまり、彼は孤独なエクササイズ愛好家から本物の奉茶志工に変わったのである。奉茶志工にとって、定期的に水をかついで山を登るという運動には不思議な癒しの力があるという。この運動のおかげで癌が治ったという人もいれば¹¹⁾、痛風が治ったという人もいた¹²⁾。

次に、積極的に公共の利益を追求しようという奉茶志工もいた。野外で振る

舞われる温かい茶は、疲れた登山客の喉の渴きを癒すだけではなく、より多くの人に自然の中を散策するよう促す役割も果たしていた。また、奉茶志工は、柴山をすべての人が訪れやすい状態に保つための一連の活動にも協力していた。彼らはごみ拾いや雑草駆除、木製の歩道の維持管理などを行った。長い年月の間に、一部の奉茶志工の間に管理人としての責任感が芽生え、自分たちが活動を続けなければ、柴山は劣化して危険で汚い荒れ地になってしまうと考えるようになった。七蔓のチームに所属するある実業家は、自分の仕事を引き継いでくれる若い奉茶志工がいつかいなくなってしまうのではないか、と危惧していた。彼の妻は、10年にもわたって彼が奉茶志工としての活動に熱中しすぎていることに不平を漏らしていた¹³⁾。

4. 対立する2つの環境保護活動

1990年代前半に台湾が民主化に着手し、都市部の中流階級の人々が動員され、集団行動を起こし始めていた頃、環境保護活動家と奉茶志工は2種類のボトムアップ式の活動を展開していた。彼らはそれぞれ、主張と奉仕という、市民社会における異なる2つの志向を体現していた。CNPPS/THA活動家による推進運動のおかげで、柴山の生態系は軍による管理が終わった後に生じた商業開発のリスクから守られた。現在、柴山は現地政府による宣伝が徹底的に行われた観光名所となっている。これは、環境保護活動家たちがキャンペーンを開始した20年前には、ほぼ考えられなかつたことである。

一方、奉茶志工たちによる関与は、現状を変えることを望まない控えめなものであった。彼らの目標は、貧しい人々を助け、公共の福祉を実現することであった。環境保護活動家は、台湾のその他のボランティア団体と同様、その数は少ない（Marsh 2003）。THAの報告によると、2009年度の有料会員数は70名以下であるとのことだが¹⁴⁾、台湾の成長途中の環境保護団体の中では珍しいことではない。盤榕の年末の宴に参加した奉茶志工だけでも、明らかにTHAの会員数を超えている。環境保護活動家は政策に対する影響力を有しており、

簡単に政治指導者と直接話し合うことができるが、奉茶志工は一般市民の間で非常に人気がある。THA は間違いなく社会運動団体であると断定することができるが、奉茶志工は慈善団体に近いと言える。

環境保護活動家による活動および奉茶志工による活動のさまざまな志向や柴山に対する共通の関心について考慮すると、これら 2つの活動は補完的であり、相互に協力し合うものであるかのように思える。しかし実際には、両者の関係は遠く、冷え切ったものであり、ときには敵対することもあった。山岳地帯における器具および材料の備蓄や野外で湯を沸かす行為は、環境を破壊しただけではなく、自然公園の規則にも反していた。さらに、自然に近付くときは必ず自給自足ができるようにし、自然に残す影響を最小限に留めなければならないということを登山客は学ぶ必要がある。しかし、奉茶志工の活動が原因で、登山客は依存的になってしまい、都市部から離れた場所にいるにもかかわらず、自然の中でも都市部で楽しめるような洗練された娯楽を楽しむことができるという、誤った期待を抱くようになってしまった。その上、奉茶志工によるお茶出しがひとたび有名になれば、特定の場所にさらに多くの登山客が集まることになる。そこで、さらに場所を作るために奉茶志工は、多くの場合苦労して森林を開拓し、ときにはお茶出し場を「装飾」するために新たな種の植物を植えることもあった。これにより、すでに脆弱な状態にあった生態系が破壊されてしまったのだ¹⁵⁾。盤榕は、東屋がない唯一のお茶出しエリアであったため、奉茶志工は盤榕にも一軒東屋を建設するよう市政府に陳情してきた。奉茶志工に賛同する一人の市議会議員が彼らを支持していたが、THA は市政府職員に東屋建設プロジェクトを却下してもらうことに何とか成功した¹⁶⁾。

THA は、自身が主催する教育プログラムにおいて、自然に近付く正しい方法を広めようと常に努力してきた。2010年の柴山祭で筆者が見学したイベントにおいて、参加児童とその親は、柴山では常に水を持参し、奉茶志工によって振る舞われる茶は飲まないよう指導を受けていた¹⁷⁾。環境保護活動家と奉茶志工の間で激しい対立が生じることもあった。ある環境保護活動家が、ある出来事について以下のように語ってくれた。

お茶を飲んでいる人たちには我慢がなりません。彼らに使用済みの茶葉をどのように捨てているのか聞いてみました。地面に捨てていたのでしょうか？私はお茶出しの責任者である A-Chuan という人のところに案内されました。すると A-Chuan 氏は無愛想に「誰の代理で来たのですか？学校ですか？それとも政府機関ですか？」と聞いてきました。私が「この組織の代表でもありません」と答えたところ、「組織や学校、政府機関の代表でないなら、私のところには来ないでいただきたい」と言われました。私は、茶葉を捨てることは環境破壊につながるということを根気よく説明しました。生分解性があったとしても、いくらでも捨てて良いということにはならないのです。人間が捨てるごみを微生物が吸収する能力にも限界があるのです。(THA Newsletter 2004 : pp. 12-14)

奉茶志工が環境保護活動家を独善的で傲慢だと見なしたとしても不思議はない。インタビュー時、多くの奉茶志工が以下のような否定的な意見を述べていた。

もし彼ら（環境保護活動家たち）が政府に訴えを起こしたとしても、政府職員は彼らに耳を傾けないでしょうし、彼らは頭がおかしい人として扱われるだけですよ。我々は公共の利益のために活動していますし、お茶出しは高雄市民のためにやっていることなのです¹⁸⁾。

環境保護活動家たちがやっていることは、単なる抗議行動にすぎません。彼らが道路のコンクリート舗装に対する抗議を行っているため、市政府は道路の舗装をする気はありません。活動家たちの中には専門家がいて、かなりの影響力があるのです¹⁹⁾。

中には左寄りの活動家もいます。彼らは山の中で火を使うことの危険性

について抗議するために私たちのところに来ることがあります、環境保護活動家の中でもそういった人間はごくわずかしかいません。100人中1人以下ではないでしょうか²⁰⁾。

環境保護活動家たちがやっていることは机上の空論でしかありません。THA が人員削減を行い、その結果現在では電話応対スタッフが1人いるだけという状態になってしまったため、寄付を強く求めているというニュースを見ました。既存のすべての社会集団には存在価値がありますが、絶対的に正しい集団や普遍的に受け入れられている集団などありません。彼らはまともに歩けもしないのに空を飛ぼうとしているようなものなのです²¹⁾。

これらのコメントすべてにおいて、THA 活動家たちの弱さが鋭く指摘されている。奉茶志工と比較すると、THA 活動家は社会的に孤立しており、資金不足に苦しむエリート主義の空論家であるように思われる。しかし、環境保護活動家に対して敵意を表していたにもかかわらず、インタビューに参加した奉茶志工のほぼ全員が、厳密に言えば自分たちの活動は違法であることを認識していた。それ故に、よく奉茶志工たちは、自身のお茶出し活動は「組織」の支援を受けていない、全くの自発的活動であるということを強調する。さらに、自身の活動が生態系に及ぼす悪影響に関して尋ねられると、奉茶志工たちはとにかくそれを否定し、中には実際自分たちは「環境保護」のために活動しているのだと主張する者さえいる。

奉茶志工たちが実際にやっていることをより詳しく見てみると、彼らの考え方があまりにも単純かつ浅はかで、完全に間違っていることがわかる。例えば、多くの場合彼らは、公共の場所で喫煙しないことと、茶を飲むのに使い捨て紙コップを使用しないことは「環境保護」と同義であると考えている。環境意識と聞くと、彼らは片付いていて清潔であることを連想しがちである。そのため、お茶出しエリアを「清潔」に保つためには、雑草駆除や森林開拓を行うことが

好ましいということになってしまいます。中には、特定のエリアのすべての樹木を除去し、より管理がしやすく「美しい」種と入れ替えてしまう熱心な奉茶志工もいる。ある奉茶志工は、このような行動を以下のように正当化している。

自然是いつか消滅します。なぜなら、それは自然のDNAにより決められているからです。ですから、自然には私たちによる改革が必要です。これらの木々は同系交配で生まれたのですが、同系交配には問題があります。私たちのやり方は完全には正しくないかもしれません、私たちは自然に対して確実に素晴らしい奉仕を行っているのです²²⁾。

言うまでもなく、この科学者ぶった発言は、発言者が無知であることを示している。茶の使用済み材料は、奉茶志工が正当化しようとしているもう1つの生態学的問題である。ほとんどの場合、次第に分解するだろうという考え方から、彼らは茶の使用済み材料をただその辺に捨てている。「山と森から来たものは山と森に帰る」として、彼らは自身のご都合主義的な茶の材料の捨て方を正当化している。しかし、因果関係を示す観察さえ行えば、この主張に対する反証を挙げることができる。使用済み材料が熱いままだと、それが捨てられた場所の地面に害が及び、不毛の土地になってしまうこともある。お茶出しエリア付近では、簡単に再び自然の一部になるとは思えないほど、大量の茶葉がいつでもうず高く山のようく積まれているのが目に付く²³⁾。

多くの奉茶志工の行動が明らかに生態系にとって有害であり違法であるにもかかわらず、不思議なことに市政府は未だに何も行動を起こさないまままでいる。奉茶志工たちは非常に人気があるため、彼らの活動を完全に禁止することが政治的に難しいのは無理もない。市政府職員が黙認しているのではないかという環境保護活動家たちの疑いは、ある意味正しいと言える。しかし、市職員は、一部の奉茶志工が休憩所全体をほぼ「私有地化」してしまっており、彼らの巨大な貯水タンクやボイラーは見た目に見苦しいという苦情にも対応する必要がある。2011年前半に、市政府は七蔓における奉茶志工の活動エリアを囲う新た

なフェンスを設置した。それ以降、奉茶志工が利用する空間とその他の登山客が利用する空間が視覚的に区別されるようになったが、お茶出しは依然として続いた²⁴⁾。

環境保護活動家と奉茶志工の間で悩む地方自治体は、明らかに板挟みになってしまっている。お茶出しのおかげで人気が出て柴山は有名になっているが、それに伴って簡単に見過ごすことのできない悪影響が出ている。近年、高雄市政府は柴山の管理を中央政府に引き継ぐという考えを支持しているが、その理由は明らかである。厄介な問題を他の誰かに押し付けたいだけなのだ。

5. 世界規模および地域規模の環境保護主義

本質的に環境保護活動家と奉茶志工の間の対立の根底にあるのは、人間と環境の関係に関する2つの意見の衝突である。CNPPS/THA活動家の基本理念は、Arne Naess が提唱した影響力の強い概念である「ディープエコロジー」に非常に似ている。「ディープエコロジー」は、人間中心主義を力強く批判し、「生物圏平等主義」(Naess 1973) を強調する概念であり、先進国においてこの概念に触発された類似の試みがいくつも行われた。環境保護活動家は、人間のニーズに対してどれだけ有用かに関係なく、すべての生物には生まれながらの価値があるということは自明のことであると考えている。CNPPS/THA活動家が主張しているように、普通の都市公園は人間が利用するためのものであるのに対し、柴山における自然公園の構想は「自然のためのもの」にすることである²⁵⁾。柴山には自然の均衡とバランスがある。したがって、すべてのトラブルと破壊は、人間による侵害行為が原因ということになる²⁶⁾。環境保護活動家は、柴山の前では人間は謙虚でいるべきだと力説する。自然を人間に適したものにするのではなく、複雑な自然生態系のありがたみを知るべきだ。すべての支配願望と欲は人間により生み出されたものであり、世界との異化による産物であることから、真の自然愛好家ならば確実に「山の気持ちになって考える」はずだ²⁷⁾。

自然が人間に与えてくれるのは、平凡な生活の中で長い間眠っている精神性を養う機会である、と環境保護活動家たちは考えている。人間の感性と経験は、豊かな自然と常に触れ合うことで豊かなものとなる。そのためには、功利主義的な関心を捨て、心を浄化し、健全な自然の恵みを受け入れることのできる状態に自身を導く必要がある。実際、柴山における生態学的惨事を引き起こしているのは、こうした見苦しい物質主義なのである。奉茶志工は、柴山という神聖な場所に明らかに都会的な快適さを持ち込むことで、同じ過ちを犯している。柴山は、「心靈的道場」として正しく認識されるべきである²⁸⁾。

簡単に言えば、CNPPS/THA の活動は、その脱物質主義的価値観や自然中心的視点において、主流派の環境保護主義という世界の流れを追随していると言える。中核的な活動家たちの学歴や専門家としてのより特権的な立場を考えれば、彼らが容易に世界の環境保護文化を吸収することができるのも当然だ。

環境保護活動家の主張の中に現地の文化的要素を見つけることは難しいが、奉茶志工の活動は、環境保護というグローバルなメッセージを吸収し、一般市民がより理解しやすく受け入れやすい現地の言葉に変えようという現地文化のための取り組みである。奉茶志工によるお茶出しとその他の支援のおかげで、高雄市民の間で登山はよりいっそう人気となった。現在、休日 1 日に柴山を訪れる人の数はおよそ 1 万人と推定されている。

奉茶志工は環境保護活動家ほど雄弁ではないが、彼らが自然に関して活動家たちとは異なる視点を持っていることがその活動からうかがえる。最も顕著な特徴は、その臆面もない人間中心主義にある。柴山は貴重なレクリエーション機会を与えてくれるため、高雄市民はまさに柴山の恩恵を受けている。奉茶志工は、自然自体の本来の価値について語ることはばかげていると考えている。この考え方を最もよく表しているのは、雅座に2010年の夏に貼り出された二行連句だろう。その内容は以下のとおりである。

柴山の道で体を鍛え、
雅座で香り高い茶を味わう²⁹⁾

ある雄弁な奉茶志工が、水を運び、茶を淹れる活動の優れた効果について説明してくれた。

この山は、多くの人々の人生を救ってきました。ここに来れば、人生は色鮮やかなものになります。来なければ、モノクロの人生になってしまうでしょう。山を登るときは常に集中していなければなりませんから、嫌なことについて考えなくなります。厄介な子供であろうと、資金難のビジネスであろうと、もうどうでも良くなるのです。これが、幸福の天人を意味する「仙」という漢字が「人」と「山」でできている理由です。(Li 2008 から引用)

定期的に運動することで多くの奉茶志工がより健康になったため、彼らは柴山を「病院」と呼ぶ習慣がある³⁰⁾。これは、環境保護活動家たちの間での「心靈的道場」というイメージとは大きくかけ離れた、非常に功利主義的な描写である。

さらに、奉茶志工が自身の環境保護活動に取り入れている現地の文化的要素が2つある。1つ目は、生命を慈しむ「養生」の文化である。七蔓と雅座で振る舞われている特別な配合の茶は、「養生茶」と呼ばれている。つまり、奉茶志工は動植物の素晴らしさを理解するためではなく、健康のために自然に近付いているのである。Tang (2011) が指摘するように、身体「養生」文化は今でも台湾人の間にあるが、彼らは同時に西洋から入ってきたスポーツとエクササイズという概念も受け入れている。奉茶志工は、「養生」文化を自然の中に持ち込むことで、既存の習慣を自然化しているだけなのである。

次に、もう1つの現地の文化的要素は、善意の慈善行為という伝統的な概念に起因する。茶を振る舞うという行為は本来、喉が渴いて疲れ切った路上生活者に対する慈悲の行為である。ただし、こうした文脈における「茶」は通常、飲料水の婉曲表現である。柴山の奉茶志工はこの伝統に「環境保護」という新

しい意義を加え、この伝統を作り変えたようだ。もはやそれは幸の薄い路上生活者に対する慈悲深い支援ではなくなり、市の住民を山に行く気にさせる行為となってしまった。原則として、奉茶志工は「功德」という宗教じみて聞こえる言葉は使わない傾向にあるが、彼らは自らの動機を「慈善心」であると説明している³¹⁾。

2つの環境保護活動の違いについてある奉茶志工は、「THA はより学術志向ですが、我々はより地域に根差しているのです」と意見を述べている³²⁾。実際、奉茶志工は伝統文化に深く根差しており、それと同時に環境保護の現代的意味を変えようとしている。THA 活動家が「学術的すぎる」という印象を持たれているのは、明らかに台湾にはほんのわずかしか支持者層がないグローバルな自然保護主義に、思想的に深く傾倒していることが関係しているに違いない。

おわりに

柴山におけるお茶出しをめぐって過去20年間にわたり続いている論争は、制度的解決により解消することができる純粋な技術的問題であると捉えることができる。特に人口が過密な台湾の都市においては、都市保全のためには野外でのレクリエーションに対する市民のニーズと生態系のバランスの両方を満たさなければならない。過去においては、市政府は無節操で決断力がないように見えたかもしれない。市政府は、環境保護活動家と奉茶志工の双方の機嫌を取るのではなく、双方の要求に応えようと努力している。しかし、地元政治家が置かれている厳しい状況は、深刻なジレンマを招いている。CNPPS/THA 活動家が夢見るような、完全に自然を第一に考えた大都会の自然公園は、それほど簡単に実現できるものではない。また、奉茶志工も、生態系に被害を及ぼすことなく活動規模を広げ続けることはできない。環境保護活動家と奉茶志工の対立する主張の間のどこかに解決策があることは明らかだ。両者ともにいつかは中庸で満足しなければならないのである。

しかし、本論文の目的は、環境保護主義とグローバル化の観点からこの事例を提示することである。グローバル化理論の一部の論者たちの単純な主張に反し、近代性の霸権主義的な世界的性質が、先進国の住民がしていることを地域住民が模倣するという意味での普遍的均一性を生み出すとは限らない。期待されている世界の一様化および均一化のプロセスは簡単には進まない。環境保護主義は、すべての人類が直面している生存危機に対処するための共通の取り組みである、と捉えることができるかもしれないが、地域ごとにさまざまな種類の環境保護主義が存在するという事実を否定することはできない。高雄市の環境保護活動家は、自身の世界観が文化的にほんどの市民の好みに合っていないように感じ、苛立ちを募らせている。一方、奉茶志工は実際に、世界中の人々が環境意識を抱いている時代の中で、伝統的な「養生」と「慈善」の文化を作り変えることによって、文化的修繕の道を切り開いている。しかし、過度の人間中心主義が原因で、彼らは環境被害に気付かずにいる。つまり、台湾の現状において断固たる環境保護が可能であるとすれば、それは地元に根差した生態系配慮型のものでなければならないということになる。

*本文書は、2012年6月30日から7月1日の期間に立教大学にて発表された国際シンポジウムの論文です。Mei Lan Huang 氏および Tzu-chi Tseng 氏のご協力に感謝いたします。

注

- 1) 本章の以下の部分では、Ho (2008) の論文から抜粋・再編成した資料を利用する。
- 2) 野帳 (2009年12月6日)。
- 3) 野帳 (2010年5月15日)。
- 4) インタビュー (2009年10月17日)。
- 5) 野帳 (2009年8月15日)。
- 6) インタビュー (2010年2月6日)
- 7) インタビュー (2009年10月7日)。
- 8) インタビュー (2009年12月21日)。
- 9) 野帳 (2010年7月24日)。
- 10) インタビュー (2010年2月5日)。

- 11) インタビュー (2010年2月6日)。
- 12) インタビュー (2010年2月6日)。
- 13) インタビュー (2009年10月17日)。
- 14) インタビュー (2009年12月27日)。
- 15) インタビュー (2009年11月21日)。
- 16) 野帳 (2010年10月11日)。
- 17) 野帳 (2010年5月22日)。
- 18) インタビュー (2009年12月21日)。
- 19) インタビュー (2009年10月17日)。
- 20) インタビュー (2010年2月6日)。
- 21) インタビュー (2010年2月6日)。
- 22) インタビュー (2010年2月6日)。
- 23) 野帳 (2010年1月10日)。
- 24) 野帳 (2011年1月26日)。
- 25) <http://www.wretch.cc/blog/takaohill/21497375> (2012年2月20日) から引用。
- 26) <http://www.wretch.cc/blog/takaohill/10519293> (2012年2月20日) から引用。
- 27) <http://www.wretch.cc/blog/takaohill/9324819> (2012年2月20日) から引用。
- 28) http://leekc-95kh.blogspot.com/2008/02/blog-post_4211.html (2012年2月2日)
から引用。
- 29) 野帳 (2010年7月25日)。
- 30) インタビュー (2010年2月6日)。
- 31) インタビュー (2009年11月15日)。
- 32) インタビュー (2010年2月6日)。

参考文献

- Beck, Ulrich (2006) *Cosmopolitan Vision*, trans. by Ciaran Cronin. Oxford: Polity.
- Chang Chun-yen (2009) *Moving Toward Consumer Culture of Public Value? Consumption Justice and Mom's Revolution of HUCC* [朝向公共價值的消費者文化？消費正義與主婦聯盟的媽媽革命]. Master dissertation at Shin Hsin University.
- Chen, Chialuen (2008) "Taiwanese Buddhists' Attitudes and Behaviors of Animal Release: The Effects of Religious Beliefs and Ecological Recognition [台灣佛教信眾的放生態度與行為：宗教信衆與生態認知的影響]." *Thought and Words* [思與言] 46 (3): 133-170.

- Fell, Dafydd (2012) *Government and Politics in Taiwan*. London: Routledge.
- Frank, David John *et al.* (2000a) "The Nation-State and the Natural Environment over the Twentieth Century." *American Sociological Review* 65 (1): 96-116.
- (2000b) "Environmentalism as a Global Institution: Reply to Buttel." *American Sociological Review* 65 (1): 122-127.
- Guha, Ramachandra (1989) *The Unquiet Woods: Ecological Change and Peasant Resistance in the Himalaya*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Guha, Ramachandra and Juan Martinez-Alier (1997) *Varieties of Environmentalism: Essays North and South*. London: Earthscan.
- Hannigan, John A. (2001) *Environmental Sociology: A Social Constructionist Perspective*. London: Routledge.
- Ho, Ming-sho (2003) "The Politics of Anti-Nuclear Protest in Taiwan: A Case of Party-Dependent Movement (1980-2000)." *Modern Asian Studies* 37 (3): 683-708.
- (2005) "Protest as Community Revival: Folk Religion in a Taiwanese Anti-Pollution Movement." *African and Asian Studies* 4 (3) 237-269.
- (2008) "Contentious Democratization of the Environment: Militarism, Conservation and Livelihood in a Taiwanese Community." *Journal of Political and Military Sociology* 36 (2): 269-291.
- (2010) "To Co-opt Social Ties: How Taiwanese Petrochemical Industry Neutralized Environmental Opposition." *Mobilization: An International Journal* 15 (4): 447-463.
- Hsiao, Michael Hsin-huang and Ming-sho Ho (2010) "Civil Society and Democracy-Making in Taiwan: Reexamining its Link." pp. 43-64, in *East Asia's New Democracies: Deepening, Reversal, and Non-liberal Alternatives*, eds. by Yin-wah Chu and Siu-lun Wong. London: Routledge.
- Kaohsiung City Government (2003). *Nature Park: A Trip in Chaishan* [自然公園：柴山之旅]. Kaohsiung: Ch'uanmen wenhua [串門文化].
- Kaohsiung City Government Information Bureau (2006) *The Love of Kaohsiung* [就是愛高雄]. <http://www.youtube.com/watch?v=KZNpH5ug0kk>. (2009/12/06)
- Li, Ch'i-ch'üan (2008) *A Competition in Chaishan* [柴山論劍]. <http://www.youtube.com/watch?v=BQe186TEl58> (2009/10/21)
- Lu, Hsin-yi (2009) "Place and Environmental Movement in Houjin, Kaohsiung." *Journal of Archaeology and Anthropology* 70: 47-78.
- Madsen, Richard (2007) *Religious Renaissance and Political Development in Taiwan*.

- Berkeley, CA: University of California Press.
- Marsh, Robert (2003) "Social Capital, Guanxi, and the Road to Democracy in Taiwan." *Comparative Sociology* 2 (4): 575-604.
- Martinez-Alier, Juan (2004) "'Environmental Justice' (Local and Global)." pp. 312-326, in *The Cultures of Globalization*, eds. By Frederic Jameson and Masao Miyoshi. Duke, NC: Duke University Press.
- Mol, Arthur P. J. et al. (eds.) (2009) *The Ecological Modernization Reader*. London: Routledge.
- Naess, Arne (1973) "The Shallow and the Deep, Long-Range Ecology Movement: A Summary." *Inquiry* 16: 95-100.
- Reardon-Anderson, James (1992) *Pollution, Politics and Foreign Investment in Taiwan: The Lukang Rebellion*. Armonk, NY: M. E. Sharpe.
- Schofer, Evan and Ann Hironaka (2005) "The Effect of World Society on Environmental Protection Outcomes." *Social Forces* 84 (1): 25-47.
- Tang, Chih-Chieh (2011) "Yangsheng, Sport and Exercise: A Preliminary Inquiry about Taiwanese Notion of Yundong. [養生、競賽遊戲與鍛鍊：本土運動觀念初探]." *Social Analysis* [社會分析] 2: 87-148.
- The Ecologist* (1992) "Whose Common Future?" A special issue no. 22 (4), July/August.
- Wapner, Paul (1995) "Politics beyond the State: Environmental Activism and World Civic Politics." *World Politics* 47 (3): 311-340.
- Weller, Robert (1999) *Alternative Civilities: Democracy and Culture in China and Taiwan*. Boulder, CO: Westview.
- (2006) *Discovering Nature: Globalization and Environmental Culture in China and Taiwan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yearly, Steve (2007) "Globalization and the Environment." pp. 239-253, in *The Blackwell Companion to Globalization*, ed. by George Ritzer. Oxford: Blackwell.